

多職種模擬カンファランス（模擬カンファレンス）

窪田 満

国立成育医療研究センター移行期委員長

国立成育医療研究センターでは2015年9月から「トランジション外来」を立ち上げ、様々な活動を行ってきた。その中で、小児医療から追い出すのではなく、年齢に応じた適切な医療を探していくためには、転院調整も大事であるが、その前に患者さん自身が年齢に応じたヘルスリテラシーを獲得することが重要であることに気がついた。

当院の実績とヘルスリテラシー獲得のためのプログラムを少し紹介させていただきたいが、患者さん一人一人、どのような支援が必要かは異なっているのも事実である。

そこで、当院の移行期委員会では、月1回、関わった患者さん一人一人についてカンファレンスを行っている。この多職種カンファレンスのメンバーは、総合診療部医師（筆者）、こころの診療部医師、母性内科医師、トランジション担当看護師、外来師長、ソーシャルワーカーである。そこで取り上げられたいくつかの症例をもとに、ここで模擬カンファレンスを行い、どのようなカンファレンスを行っているか、皆さんに見ていただきたいと思う。

その中で話し合われていることはいくつかある。

ヘルスリテラシーが獲得されていないのではないかとということになれば、その支援に関して話し合われる。

成人移行先の調整が難しいという場合は、在宅診療医やプライマリ・ケア医と連携をすることで始めることも考える。転院調整として、今まで高度医療機関の専門医に紹介し、残念ながら転院を断られることが多かったが、在宅診療医やプライマリ・ケア医に日常診療をお願いすることにより、急変時は成人診療科のネットワークの中で対応し、専門医との連携もとっていただけることがわかってきた。

患者や家族と当院との強い結びつきの中で成人診療科への転科に家族が難色を示す場合は、主治医ではない総合診療部医師（筆者）がご家族と話し合うこともある。

成人診療科の医師から、馴染みのない疾患や多臓器にわたる複雑な病態を持つ患者の転院にが難しいと言われた場合は、先方の病院に出向いてカンファレンスを行うこともある。

このような形で、多職種カンファランスで話し合われたことが実行されていく。もちろん、うまく行くことばかりではない。それでも、少しずつ、成果は出ていると感じている。